

クリニカルエビデンス・コンサイス issue 16 日本語版

葛西龍樹 監訳

＜書評者＞ 福井次矢（聖路加国際病院・病院長）

本書は、英国医師会出版部（BMJ Publishing Group）が世界中の医師に「根拠に基づいた医療（EBM：Evidence-based Medicine）」を実践してもらうために作成・出版している『BMJ Clinical Evidence Concise』（第16版）の日本語訳である。

内容は、日常よく遭遇する226疾患の治療法や予防的介入の1つひとつについて、有効性や有害性を示す根拠（エビデンス）を体系的（システマティック）に検索・評価し、次のような6つに分類したものである。

- ・有益である：複数のランダム化比較試験もしくはそれに代用可能な最高の情報源からの明確なエビデンスにより有効性が示されており、予測される害が利益に比べて小さい。
- ・有益である可能性が高い：“有益である”に分類された項目に比べて、有効性が十分には確立されていない。
- ・有益性と有害性のトレードオフ：臨床医や患者が、個々の状況や優先順位にしたがって利益と害を比較評価すべき。
- ・有益性不明：現時点でのデータが不十分か、あるいはデータの

質が不適切。

- ・有益性に乏しい：“無効ないし有害である”に分類された項目に比べると、有効性の欠如がそれほど明確にされていない。
- ・無効ないし有害である：無効性または有害性が明確なエビデンスによって示されている。

たとえば、急性虫垂炎の治療については、「有益である」に手術＋抗菌薬投与、「有益である可能性が高い」に腹腔鏡手術と開腹手術との比較（小児）、「有益性と有害性のトレードオフ」に抗菌薬と手術との比較、腹腔鏡手術と開腹手術との比較（成人）、「有益性不明」に抗菌薬（無治療/プラセボとの比較）、手術（無治療との比較）、「無効ないし有害である」に開腹手術における断端埋没と単純結紮との比較、などが挙げられ、それぞれに10行以内の説明が付されている。まさに、診療の現場（point of care）で必要なエビデンスを、必要最小限の情報量にまとめたものである。

世界中の医療現場でEBMが実践されさえすれば、患者アウトカム（重篤な症状、QOL、生存率、障害、歩行距離、出生率など）が

著しく改善することは確かであろう。問題は、どうすれば実現できるか、である。1人ひとりの医師が、眼前の患者で湧き上がった疑問点について、丹念にEBMの手順に則ってエビデンスを探し出し、信頼できるものかどうか評価し、エビデンスを患者に適用するかどうかを判断すればよいのであるが、実際上のさまざまな理由から、そのようなEBMの手順を踏むことのできる医師はごくわずかである。そこで、頻度の高い臨床問題については、専門家があらかじめエビデンスを検索・評価し、実践現場で使いやすいかたちで提供するための試み（診療ガイドライン、クリニカルパス、電子カルテの診療支援ソフト、リマインダー等々）が多くの国々で行われつつある。

過去約20年間にわたって、EBMの普及に関して英国医師会出版部が行ってきたさまざまな取り組みは、まさに世界の医療界を常に先導するものであった。診療現場で役立つかたちでエビデンスを提供する本書がその典型であり、わが国においても、多くの医療者が座右において活用されることを心から願うものである。

●A5変型 頁1,432 2007年
定価11,550円
（本体11,000円＋税5%）
[ISBN978-4-260-00395-7]
医学書院刊